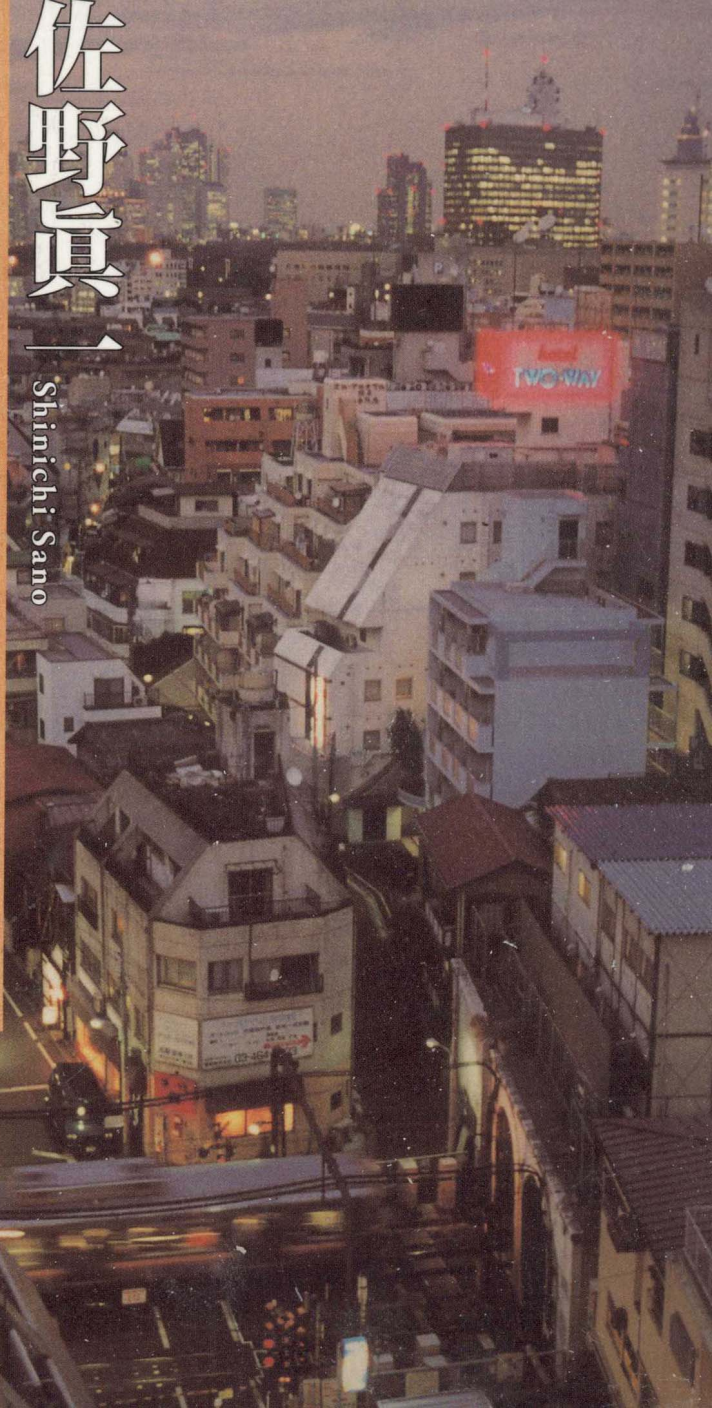


東電の殺人事件

佐野真一

Shinichi Sano



野真一

Shinichi Sano

水電の殺人事件

新潮社

JASRAC 出0004632-006

CHIM CHIM CHER-EE

Words and Music by Richard M. Sherman And Robert B. Sherman

© 1963 by WONDERLAND MUSIC COMPANY, INC.

Copyright Renewed.

All Rights Reserved. International Copyright Secured.

Rights for Japan controlled by Yamaha Music Foundation.

とうでん さつじん じ けん
東電OL殺人事件

著 者

佐野眞一（さの しんいち）

発 行

2000年 5 月10日

6 刷

2000年 6 月30日

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

〒162-8711 東京都新宿区矢来町71

電話 編集部 03-3266-5411

読者係 03-3266-5111



印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

加藤製本株式会社

価格はカバーに表示してあります。乱丁・落丁本は、
ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

© Shinichi Sano 2000, Printed in Japan

ISBN4-10-436901-2 C0095

東電O・L殺人事件／目次

プロローグ 7

第一部 墮落への道

13

第一章 迷宮 15

第二章 幻聴 24

第三章 富士 30

第四章 証拠 39

第五章 否定 52

第六章 遺骨 59

第二部 ネパール横断

69

第一章 山嶺 71

第二章 公判 77

第三章 検証 90

第四章 夜気 97

第三部 法廷の闇

第一章	目撃	201
第二章	実検	214
第三章	拘置	227
第四章	精液	238
第五章	墓地	250
第六章	顧客	255
第七章	路上	269
第八章	暴行	156
第九章	調書	174
第十章	幻影	183
第六章	落涙	125
第七章	供述	138
第五章	帰郷	102

第四部 黒いヒロイン

第八章	肉声	288
第九章	遍歴	318
第十章	部屋	340

345

第一章	求刑	347
-----	----	-----

第二章	結審	363
-----	----	-----

第三章	陰毛	372
-----	----	-----

第四章	閉廷	381
-----	----	-----

第五章	拒食	400
-----	----	-----

第六章	滑落	415
-----	----	-----

第七章	対話	427
-----	----	-----

エピローグ	439
-------	-----

あとがき	441
------	-----

東電OL殺人事件

プロローグ

「東電OL殺人事件」が起きたとき、世間は「発情」といってもいいほどの過剰な反応を示した。昼は美人エリートOL、夜は売春婦。マスコミは彼女が殺人事件の被害者であることをそっちのけに、昼と夜の二つの顔の落差に照準をあてたストーリーづくりに狂奔していった。

報道は過熱し、ついには彼女がベッドの上で撮った全裸写真を掲載する週刊誌まで現われた。なぜ世間はこの事件にこうも心をざわつかせたのか。なぜわれわれは彼女の素性がこうも気になるのだろうか。

集中豪雨的なブライバシー報道に、より強く「発情」したのは、実は送り手側のメディアより、受け手側のわれわれだったのではなかったか。

男女雇用機会均等法が導入された一九八〇年代、企業の中に大量に入りこんできた高学歴の女性総合職たちは、それまで男社会に安住していた会社人間にとって、明らかに「異物」だった。東電OL殺人事件への異常な関心は、いわばその反動だったともいえる。そんな一見気が利いた風な賢しげな解釈をした文化人もいた。

われわれはこの事件が残した澱のようなもやもやをいまだ抱いたまま、殺された彼女のとった

行動を猟奇と困惑のまなざしで眺めている。

この事件にふれたとき、われわれはなぜこうも大量のアドレナリンを体内から分泌しなければならなかったのだろう。

コンビニエンスストアで百円玉を千円札に、千円札を一万円札に「逆両替」し、井の頭線の終電で菓子パンを食い散らかし、田山町の暗がりですり小便をする。マスコミに報じられた彼女の行動の一端を知ったとき、私の頭にまっさきに浮かんだのは、坂口安吾がまだ焼跡が生々しく残る戦後でもない昭和二十一（一九四六）年四月に発表して大きなセンセーションをまき起こした『墮落論』のなかの一節だった。

「……戦争は終わった。特攻隊の勇士はすでに闇屋となり、未亡人はすでに新たな面影によって胸をふくらませているではないか。人間は変りはしない。ただ人間へ戻ってきたのだ。人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない」

安吾は『続墮落論』のなかではこうもいつている。

「……天皇制だの、武士道だの、耐乏の精神だの、五十銭を三十銭にねぎする美德だの、かかる諸々のニセの着物をはぎとり、裸となり、ともかく人間となって出発し直す必要がある。さもなければ、我々は、再び昔日の欺瞞の国へ逆戻りするばかりではないか。先ず裸となり、とらわれたるタブーをすて、己れの真実の声をもとめよ。未亡人は恋愛し地獄へ墮ちよ。復員軍人は闇屋となれ。墮落自体は悪いことにきまっているが、モトデをかけずにホンモノをつかみだすことはできない。表面の綺麗ごとで真実の代償を求めることは無理であり、血を賭け、肉を

賭け、真実の悲鳴を賭けねばならぬ。墮落すべき時には、まっとうに、まっさかさまに墮ちねばならぬ。道義頽廃、混乱せよ。血を流し、毒にまみれよ。先ず地獄の門をくぐって天国へよじ登らねばならない。手と足の二十本の爪を血ににじませ、はぎ落して、じりじりと天国へ近づく以外に道があるか。

彼女は、安吾のいう、人間が生きるということは結局墮落の道だけなのだということを、文字通り身をもってわれわれに示した。彼女は、小賢しさと怯懦と偽善にあふれ、墮落すらできない現代の世にあつて、墮落することのすごみをわれわれにみせつけた。われわれは彼女が潔く墮落する姿に、副腎皮質を強く刺激されたのだ。

最初に断わっておくが、私には、彼女のプライバシーを暴く気持ちは毛頭ない。それは、過熱する一方のプライバシー報道にたまりかねた彼女の母親が、マスコミ各社に送った訴えに心を動かされたからではない。

へ私は、この度、渋谷殺人事件で被害者となりました渡辺泰子の母親でございます。

このたびの事件では、皆様をお騒がせいたしております、誠に申し訳なく存じます。私にとりまして、ただただ驚きであり、悲しみを表す言葉もございません。

犯人を憎み、恨むのは勿論ですが、その上、このところの新聞、週刊紙、テレビ等の報道は、私の知らない娘の姿が伝えられており、中には心震えるような報道もございます。私は目を閉じ、耳を塞ぎたい思いでございます。

悲しみと、怒りと、恥かしさは言葉に尽くせるものでなく、ただただ消え入りたい気持ちでございます。娘はどうやら人様にお話出来ないようなことをしておりますたようで社会の皆様には恥かしくこの点、申し訳なく心からお詫び申しあげたいと存じます。

たゞ、それでも娘はあくまでも事件の被害者でございます。殺人者の手によって命を落してしまつた事によつて、社会的には十分すぎるくらい十分に制裁を受け、償いというにはあまりにも大きな償いをいたしております。

その上に、どうしてこゝまでプライバシーに及ぶことを白日の下にさらさなければいけないのでしょうか。

何とぞ亡き娘のプライバシーをそつとしておいて下さい。もう、これ以上の辱めをしないで下さい。

そして娘を安らかに成仏させてやって下さい

実の娘を惨殺され、その上これでもかとはかりにプライバシーを暴きたてられた母親の気持ちが惻々と伝わってくる文面である。

しかし、この訴えに呼応するようにマスコミ各社にあてられたいわゆる「人権派」弁護士たちの公開質問状や、一連のマスコミ報道は売らんかなのためであり、死者の凌辱以外の何物でもないとする右翼団体の抗議文には、死者を悼むという気持ち以上に、世のいわゆる良識派に迎合する偽善の匂いが強く立ちこめている。

それ以上に問題なのは、左右両陣営からのこうした抗議活動によつて、マスコミ各社がまるで貝が殻を閉ざしたように一斉に沈黙をきめこんでしまったことである。右翼、左翼が相乗りしたこの構図はなにやら、戦時中の大政翼賛会の言論封殺の動きを連想させて、背筋に冷たいものがある。

繰り返すが、私の本意は彼女のプライバシーを暴くことではない。あえていうならば、この事件の真相にできるだけ近づくことによつて、亡き彼女の無念を晴らし、その魂を鎮めることがで

できれば、というのが私のいつわらざる気持ちである。

興味本位の報道は論外として、いわゆる「人権派」の人びとの申し入れによって、事件そのものが闇から闇に葬り去られてしまうことは、言論にいささかなりとも携わる者にとって、とても座視できない事態である。そればかりか、彼女の霊をも凌辱することになるだろう。

遺族にとっては思い出すのもおぞましいことだろうが、私が以上のような考えをしたためた手紙をあえて彼女の母親あてに送り、ぜひ取材に応じていただきたいと申し入れたのも、マスコミの及び腰によって、事件が風化、いや忘却化させられてしまうことを恐れたからである。

もしこのままの状態が続くならば、母親の訴え通り、彼女の魂は永遠に浮かばれないことになるだろう。

だが、事件から三年たった二〇〇〇年三月にいたっても、母親からの連絡はない。遺族の証言という決定的なファクターを欠いたままこれを書いていることを最初に正直に告白しておく。

彼女はなぜ墮落の道を選んだのか。彼女をそう仕向けたものは何だったのか。私は彼女と何らかの形で接触した人びとにできるだけ多く会い、三十九歳の若さで命を落とさなければならなかった彼女の心象に映った風景を忠実に再現してみたいと思った。

結論めいたことを先にいってしまえば、取材をすればするほど謎は深まり、彼女の行動の不可解さがますますばかりだった。というより、事件としてはごく単純なこの出来事の周辺には、これまでマスコミがまったく見落としてきたおびただしい事実があふれていた。私は、行く先々で、現代社会の深淵を突然のぞきこまされるような思いにかられ、それがまた私をさらなる事実発掘の衝動にかりたてた。

それらの事実はいずれも伝奇小説、もつといえど怪談じみた暗合にみちており、肌粟が生

じたことも一度や二度ではなかった。

最初の不思議な暗合は、彼女が殺害された渋谷区円山町それ自体にひそんでいた。

第一部 墮落への道



迷宫のような円山町の路地